

民草の和をつなぐ会 第十四回議事録



●おやじ

今回発表者の人は特に居ないので、日本自治集団で議論している、「農」の話を、「民草の和をつなぐ会」でも共有し、皆さんのお知恵を拝借していきたいと思う。

現在、日本自治集団の方で、具体的なアクションをする為に議論しているテーマがあり、それが「農」。「農」の話について、三浦さん、話をしてもらって良いでしょうか？

●三浦颯さん(弟)

愛媛で農業をやっている三浦です。前回、日本自治集団の会合で、「農」がどんな状況に置かれていて、それをどう復興しなければならないのか、自分たちなりに、その問題意識と、その解決方法、具体的解決方法を提案させてもらった。

日本の食料問題がどんな状態に置かれているかということに関しては、それぞれ意識を持たれていると思うが、自分達は現場に入っている立場なので、日本の農業が大変な状況に置かれているのかということに関しては、切実な問題意識を持っている。

現状、日本の食料自給率は38%。そして、農業に使う肥料に関しても全て外国輸入になっている。今の「慣行農業」と呼ばれる日本の農業ですら、海外の依存が甚だしい。

日本人が普通に食べ物を作って食べていくという、本当に簡単な農業ですら、日本人だけでは行えないような状況になっている。

「食料自給率に問題があるなら、みんなで米作ればいいじゃん」となったとしても、それに使う肥料に関しては、全部ロシアやウクライナの方の鉱石から取って来たりするので、仮にその供給をストップされてしまったら、日本ではお米づくりもままならない状態になる。

それを解決するようなノウハウや方法論に関しては、今の慣行農業に移っていく中で消失して行っており、食糧危機的な面だけにおいても、日本国内の中にあるものだけで作っている農業を取り戻して行かなければならない。

また、農業と神道というのは密接に繋がっていて、農本的な生活、また、家族的な共同体の中で日本の伝統と文化が培われたということもあり、現在はそれが失われてしまっている状態。そして、それが日本の墮落に繋がったり、世界の破滅に繋がっていると考えている。

本来の農業を明らかにして、取り戻して行かなければならないということを、日本自治集団で提案させていただいた次第です。

●おやじ

「では、やろう」と言っても、それができない現状がある。100%自分の食い扶持を作り、種や苗を自分で作れたとしても、それでも尚、固定資産税などの費用は発生する。

自給自足ができたとしても、結果的には、費用を支払わなければならない部分のマネーを、何らかの形で稼がないといけない。稼ぐ農をやっていくこと自体が大変だったり、稼ぐ農を実践しようと思ったら、農業のスタイル自体が根本から変わってしまうという問題がある。

それをどのように解決できるだろうか、ということを現在議論している。それは一農家で解決できるような問題ではなく、本質的に言えば、日本の制度全てが関わっているので、そういうものを根本的に見直していかなければできない。

かと言って政府がそれをするかと言えば、現在は正反対の政策を行っている。グローバル化の方へ政策全体が向かっており、小作(小さい農民)よりは、企業経営とか、資本投入とか、そちらの方に向かっている。政府を当てにする訳にもいかない。じゃあどうするか、という、とても難しい問題。

そこで、皆さんから、「こうしたらいいのでは？」ということ募るのはどうか。

「こんなところはどうなっているの？」とか「問題を具体的に知りたい」とか、質問でもいいし、「こういうのはどうだろう」というアイデアを出してもらうのも良いかもしれないので、常識的なことは気にかけず、自由に発言してもらいたい。

●参加者

1点質問をしたい。自給率は現在38%。でも、それも燃料や肥料を輸入して成り立っている、ということであれば、それが仮に全て無くなって、マンパワーで行った場合、38%はどれだけ下がるものなのでしょうか？

全く物が入って来なくて、日本だけなんとかしなければならないという状態。トラクターも動かさない。感覚的にでも良いので、どれぐらい38%から下がるのかを知りたい。

●三浦颯さん(弟)

感覚的に言うと、0.1%以下ではないかなと思う。

日本の農家人口は130万人を切っていて、日本の人口の1%未満。そのうちの20代・30代・40代という、生産世代は数万人しかいない。その他は、60代や70代など、ちょっとだけやるような兼業農家さんや、引退して少しだけたっているような方ばかり。要するに、鋤を持つのは厳しい人がほとんど。

無農薬、無肥料でやっていこうとしても、そこに精通する方法論というのは、ほぼ失われつつある。ほとんどがトラクター・田植え機・コンバイン有りきで大量の面積を管理している。

今、農業人口一人あたりの農地は、3町歩(3万平米)で、それを耕さなければならない。これもトラクターがあるから出来るだけであって、手で耕そうとすると、肌感覚的には一人3反ぐらいがギリギリ。

メガファーマーと言われている人は、80町歩とか、100町歩を耕しているので、トラクターがなかったら、その人達も3反になる。そうすると単純に食料自給率は、100分の1になるので、38%だったら、0.38%になるのではないかなと思う。

●参加者

完全に時給は無理ということですね。

●三浦夏南さん(兄)

海外がちょっとでも輸出をストップしたら、日本は全部駄目になるぐらい農業が外国依存している状態。なのでいつでも殺せる状態にある。

●三浦颯さん(弟)

化成肥料でも、ロシアとウクライナの戦争で、一番高い肥料だと40%ぐらい値上がりしている。でも、農作物の値段は上げることができない。それは、一番所得が低い人でも食べられる値段に設定しなければならないという理由。

国の補助も、日本は少ないので、ほとんどの農家はやっていけない。

現在、やっていける農家というのは2種類しか居らず、「商業的農家」と、「工業的農家」。

「商業的農家」は、高品質、高単価作物を扱い、穀物ではなく、高い苺だったり、高いバナナを売ったりしている。そのような作物を、日々食って生活できるか、と言われればそういうものではない。しかし、こういう農家しか食っていけない現状がある。

もう一つは、「工業的農家」で、外国人労働者をどんどん入れて、自分は耕さず、電話をして命令するだけ。ただ単に、食料生産工場になっているのが今の農業経営の実態。

●参加者

この2つの農家はどちらも問題があると思う。一番目は農協ありきで、農協をぶっ壊さないとうとうしようもない。第三の農家の道はないのだろうか。

もしくは、高品質の何かを作るか。

●三浦颯さん(弟)

現在、海外で行われているのは国の補助。スイスだと、数10%は国の補助金で賄われていたり、ドイツだったら農家は1千万ぐらいの年収がある。

しかし、これも政府が関わってくることであり、日本は真逆の政策を行っているので、政府で解決するのは無理だろうと思う。

資本主義のベースから外れた、新たな社会システムを構築していかなければ、農家は本来の農業を営んでいけない。それが自分たちが至った結論であり、その方法をみんなで見つけていけたらいいと思う。

●参加者

自分の仲のいい経営者が、作物への水やりの為に、20拠点ぐらい朝晩で回ると言っていた。それも、最近はどうも不可能になって来ていて、ITを使って全部事務所で管理できるようなスマート農業という仕組みを作ったらしい。

それを国から表彰されたりしているらしく、現在は低料金でスマート農業を全国に広めるという活動をやっている。

その体制になったとしても、人の問題があったりすると思うし、どれだけITで進めることができるかは不明。しかし、どっちもいいところを取りながら、第三の手を考えないといけないと感じる。

●三浦颯さん(弟)

「食料生産」というところだけを考えると、今言われたようなハイブリットのやり方を考えていかなければいけない。

しかし一方で、ハイブリットのやり方はITと関わって来る。そしてITは衛星と関わって来る。そうになると、アメリカや、中国のような、Googleなどのシステムを使っているのも、それも使えなくなったら結局八方塞がり。機械化していくことは依存度を高めていくことにもなると思う。

しかし、現状やっつけている農家は少ないので、そうやってITを活用していくのは、当面の一つの手だとも思っている。

自分たちが本当に進めていかなければならないと言っているのは、祭祀的で、共同体として行っていく農業であり、日本の伝統文化を護り、育てていく本質的な農業のこと。

これこそが日本の伝統文化を養って来たそのものだろうし、それが世界を救っていく思想になると思っている。この農業を体現できるようにならないと感じている。

●参加者

あまりこのテーマには詳しくは無いが、話を聴いていて思い浮かんだのが、ソ連の集団農場。農地は個人管理ではなく、集団として管理して、集団として一括で運営する方法。

耕作放棄地など、余っている土地を、都会の市民に格安で貸して、週末に農業をしてもらうなどはどうだろうか。そうすると、いざと言う時に、その貸し付けた人達も食っていけるようになるのではないだろうか。

●三浦颯さん(弟)

経済的な面においても、皆で一括してやっていくということは良いと思う。しかし、肥料の海外依存の問題は全く解決していない。

そして、肥料を使わない農法というのは現在には行われていない。何故かと言うと、それをする食っていけないから。その農法で育てたお米は、本来一袋15万で取引されないと割に合わないぐらい労力がかかる。でも15万もかけて、米を食いたい人はいないと思う。

なので、その農法の開発というのは、利益を度外視したところで確立していかなければならない。しかし結局、それは利益ベースやマネーベースの資本主義社会上では成立し得ない。

なので、マネーベース、資本主義ベースから逸脱したところで、生き方を模索していかなければならないというのがある。

先程言われたように、人に土地を貸して耕作放棄地をなくしていくのも良いと思うが、日本の伝統文化というのは、日々の暮らしの中で生成されるもの。

農業体験も、一つのきっかけになったりだとか、教育の一環になったりするとは思いますが、本質的な伝統文化というのは、長年かけて土作りをするように為されてきている側面がある。

「一括でバーっとやっていけばいい」というのは、表面的なところでは解決されても、根本的な部分が変わらない。結局、行き着く先は今の資本主義とほとんど変わらないのではないかなと思う。そこが難しいところ。

●参加者

江戸時代までは、完全循環社会と言われていて、食物を食べて、その糞尿を田んぼに返して、それが肥料になっていたというのがあった。

自分が大阪から彦根に移住した時、大家さんが、正にそれをされていた。家の隣で汲取式の糞尿を肥料にして、朝撒いていたりした。そして、出来た野菜やお米を、おすそ分けで貰ったりしていた。

実際、それは自分達で食べる分だけなので、大きな田んぼでもなかったし、商売になるようなものではなかったけれども、江戸時代までは、そういう生き方ができる社会システムが構築されていたので、やるんだったら、システムだけそこに戻すとなども考えていかないと、日本人だけでやろうと思うと、かなり困難だと思った。

●三浦颯さん(弟)

おっしゃる通りで、江戸時代は自給自足のシステムが組まれていた。しかし、その前提として、国民の90%が農民だったということ。実際、この場に居る人の9割が農民じゃなかったら成り立たないという社会構造だった。

現代は、マネーで、何でも食べ物を買ってしまうのが、そもそもおかしいのではないかと思う。

畑を耕して、お米を一年かけて育てて、来年蒔く種の方と、再来年までの備蓄と、自分たちが食べる分を取って、その余剰を税金として納める。そして、それをまた使って、というような社会構造じゃなかったら駄目だと思う。そこに本来、人間性が育つものだとも思う。まず、そこに還らないといけないと思う。

今の資本主義の世の中は、何も物が生まれていないのに、先にマネーを発生させて追いかけていく。だからどんどん欲が増幅して、誰も収められないようになっている。その欲まみれの世界の中で、更に欲がまみれていくと、世界は崩壊していく。それは、自然の摂理と合わないから。

そこに気づいて、今の資本主義的なマネーベース的な世の中というのを、完全に変えてやらないと、さっき言われていたような江戸時代の完全循環社会に戻ることはできないと思う。

●参加者

江戸時代と今の世の中は全然人口が違って、江戸時代は、7千万人か6千万人。今は、1億2千万人。9割農民で、やっと6千万人食わせていたのを、今は1億2千万人を食わせないといけない。

●参加者

昭和はその為に移民に出していた。

●参加者

昨日京都で、弁護士さんが同じような勉強会を開催していて、そこで言われていたことを思い出した。

食料自給率が低いから、輸入の小麦などを買わされていて外国依存になっているという話をされていた。

小麦などの食料の関税を下げて輸入して、日本の農家がどんどん落ちていき、どんどん工業化して、自給自足の農業をベースにした社会構造から工業製品を作って海外に輸出するような社会構造に転換した。そして、明治維新から戦後にかけて、全て農業から工業にシフトしていった。

一方、海外に日本の車を販売しやすいように、関税を下げてもらっていたのではないだろうか。そこで日本は、メリットという毒虻を食わされたのではないかと思う。現代社会で、医療なども恵まれているのは、農業を犠牲にして、工業で外貨を稼ぎまくったから。

食べ物を安く輸入して、その分の利益でビルをどんどん建てて、いい服を着て、いい生活するところまでがセットなので、そこを逆回転させて、江戸時代に戻るとするのは、日本全体でどれだけ付いて来れる人が居るのだろうかと思う。

だから、戻すのではなくて、行き過ぎているのをちょっとだけ調整するぐらいで良いのではと思う。

効率的に考えると、江戸時代の農業では今の人口を食わせられないので、調整をどうすべきなのか。都市部だったらお金は有り余っていると思うので、投資とか不動産の世界に住んでいる人を如何に巻き込めるかだと思う。要するに、都会にお金は余っているので、お金が足りなくて農業できないところに循環させるということ。

共産革命が資本主義を完全に否定しようとしたが、それを出来なかったのも、上手にそれを実現する道はないものか。

また、先ほど調べていたら、農水省のホームページで、日本人のお米の消費量は年間860万トンと出てきた。1億2千2百万人で割って、12ヶ月で割ったら一月5.87キロ。これだけあると自分は生きていけるかなと思った。

なんとか頑張ったら日本人は生きていけると思うので、お金を持っている人も巻き込みながら進んでいくような、そういう和ができたらいいなと思った。

●三浦颯さん(弟)

今のお話を聞いて一つ思うのは、結局マネーをベースに全部が考えられているということ。だからそういう話になる。

都会にお金が余っていて、どこかに農業をやれる農家が居て、「余っているお金で支援したらいいんじゃないか」とか、「その農産物を買いまくったらいいんじゃないか」とか、「ここで循環させたらいいんじゃないか」とかいうアイデアはあると思うが、結局、マネーの世界では、より多くのマネーを払ってくれるところに、農産物を売らないだろうか？

今、日本円ってどんどん価値が下がっていて、「じゃあドルでもっと買います」と言われて、「いやこれは日本の米なんだ。日本の安全保障なんだ。だから売らない！」という農家がどれだけ居るかという事。それがほぼ居ないのが現状だと思う。

農家は、この資本主義社会の中で、非常に虐げられている。その中で、「農地を護ろう」という意思だったり、「農業をやっていこう」という意思でやっている。

もし、食料危機が来た時、「日本人に食料を分けて下さいね」と言われても、「え、なんで苦しかった時は今まで補助金もくれん、誰も買ってくれん、お米も安く叩かれて、本当はふりたくもない農薬を撒いて育ててきたのに、なんで今更、日本人面して来るのか」と思うと思う。その時、助けてくれる農家がどれだけ居るかって言われたら、本当に少ないと思う。

●参加者

そうなる前に何かできないかなと思って提案をした。

仮にそうすると、日本人内で対立構造になってしまうので、お金を持っている人でも、そういう危機感を持っている人をこっちにつなげて還流できないかなと思う。

●三浦颯さん(弟)

これはあくまで一個人的な考えではあるが、本当はうまく調整していけたらいいのだろうけど、マネーベースの資本主義の中で、農業をどうにか安定調整できないかな、というのは無理だと思っている。

食料安全保障という問題に関しては、日本人が、日本国内の物だけで自給できる米作りを模索していくべきではないかと思う。

結局、何かに依存して生きていくというのは、自給とか、自治とかと全く真逆だと思うので、そこに対しての依存度を、まず減らさなければならないと思う。

●参加者

自分は農業に関して詳しくないが、肥料の外国依存がどのぐらいのものなのか教えてもらいたい。

●三浦颯さん(弟)

窒素・リン酸・カリウムというのが肥料の三要素。

窒素はアンモニウム状で、中国からたくさん輸入している。カリウムに関しては、ロシアの鉾山から取ってきた石のカリウムが99%。日本で生産しているものは無いと言っても過言ではない。窒素・リン酸・カリウムは全て海外に依存している。

●参加者

元々肥料は国内で生産されていたのでしょうか？

●三浦颯さん(弟)

昔は、有機的な、鶏の糞や、米ぬかを使ったり魚粕を肥料にして作物を育てていた。無肥料でも育つのは育つが、収量が安定しなかったりした。

江戸時代と今では、一反の面積の収量というのは倍以上異なる。そうやって肥料と組み合わせることで小さい規模で最大の収量を実現していき、食料安全をしていこうというのがあったのだろうか。

●参加者

肥料のことで、自分自身、化学品に携わる仕事をしている。

今の化学合成肥料というのは、窒素とリンと、カリウム。この3つがないと植物の成長が阻害されると言われている。

窒素はなくても大体いけるが、リンとカリウムは必要。昔は化学肥料を使っていなかったから、生産が限られていたが、戦後、爆発的に食料問題を解決したのは、圧倒的に化学肥料の力。

テクノロジーの力で、食物が吸収できるような形に配合して生産数が増えた。それを否定して戻すのは無理があるのではないかと思う。ある程度は必要で、そこは輸入0には出来ないと思う。

●三浦颯さん(弟)

もし、その輸入が0になった時にどうするか考えておかないといけないのではないのでしょうか？

●参加者

米は化学肥料がなくても育つのではないですか？

●三浦颯さん(弟)

もちろん、なくても育ちますが、あつた方が安定的に収穫することができる。

●参加者

もしかしたら、そもそもの前提が的外れかもしれないが、発言をさせていただきます。

今の日本の人口規模は1億2千万ということで、少し減って来ていますが、6千万の時代でも、自国で食料をまかなえなかった。それを踏まえて、「日本人全員で農業をしよう！」として舵を切って

も、便利な生活に慣れ、工業に携わっている人も居るので、それでみんなが国内だけで食えるようにしようとしても無理が出てくると思う。

侵略を正当化するなどは置いておくが、いっそのこと大東亜共栄圏を作って、アジアとして全体的に食料を生産して、アジア全体で生活を便利にして、アジアとして、皆で賄いながら生きていく必要があるのかと思う。

石器時代に戻れるわけでもないし、日本国内だけだと、どうしても食料の生産にほころびが出てくるのかなと思う。

●三浦颯さん(弟)

人口と食料の問題ってあるじゃないですか。人口は増え続けているのに、耕せる農地には限りがありますよね。それって自然と調整されていくものなのかなと思っている。耕せる土地は限りがあって、それに対して人口だけが爆発的に増えていくということが地球として異常なのではないかと思う。

なぜそれが可能になっているかという、人間の行き過ぎた自然破壊の上に成り立っているだけに過ぎないのではないかと思う。

人口が増え続けていくのは、もちろんあり得ると思うが、爆発率は異常で、人間のエゴが自然を支配する上で成り立っているだけだと思うので、本来の自然と共生していく人間の在り方というのを取り戻していけば、人口と食料の問題は自ずと調整されていくのではないかと感じる。

観測的で、哲学的な話でもあるが、「今の状況を、どうにか妥協しながらも成り立たせていこう」という、現在の延長線上でしか未来を描けていないのが問題だと思っている。なぜそうなったかと言うと、荒谷さんが言われたような、大祓の言葉が無くなったからだと思う。

地域ごとの氏神だったり神社を中心として部落があって、その中で共同体として自給自活的な生活をしていく中で、有機的に繋がり、天皇陛下を中心として発展していったのが日本国家であって、その国体が尊いのではないのでしょうか。

「維新を起こしていった先にしか、国体に基づいた生き方を体現する、本来の平和は訪れないのではないか」というのが根本にあって、その根本的問題に取り組んでいくためにどうすべきか考えるのが先だと思う。

今起こった悪いことに、対処療法的に解決していただくのその先には、根本治療はない。西洋医学が陥っているのは、正にそれではないだろうか。どんどんウイルスが出てきて、それに対してどんどん治療薬を出して対処する。イタチごっこでしかない。

それが「欲」のイタチごっこを生んで、物が溢れ返って、一見豊かに見えるけど、実は自然を破壊した上に成り立っていたりする。海外でも、辛い労働環境の上に成り立っているバレンタインデーもあったりする。

目の前に見えていないから皆無いように感じているけれども、皆が食べている物は作っている人がいる訳で、その根本的なことを忘れてはいけない。

根本的なものを先に伸ばしていくことが多いが、その根本的な問題を解決していく方法を見つけていかなければならないのではと思う。でなければ、ただのイタチごっこになってしまう。

●参加者

非常に興味を持って話を聞かせて頂いた。その考え方には賛成。無意識的にも、そういうのがいいなと思う日本人はたくさん居ると思う。

今の行政や政治を含めて変えよう、というのは難しいのはよくわかるが、結局、国家観だったり、自分達が何を目指しているのかが欠如している。農業に限らず、自分達が自立して、依存しない状態を作っておくということは、自分達の行く方向を主体的に決めることだと思うので、どの分野でも大切で、どこでも同じような問題が起きていると思う。

今話を伺って、仰っているようなことを現実の物にしようとした時、どうしたら良いだろうかと考えて聞いていた。

何千人とかの単位で、小さな成功例を作るというのが良いと思った。みんなから羨ましがられるような塊を作る。

例えば、今話を聞いていて、作られた米を買ってみたいと思った。そういう人ってたくさん居ると思う。

現代の仕組みの中に乗ってやるなら、間に入る業者を入れずに売り買いすることも可能だと思う。ただ、それだと言われていたことに抵触してくると思う。

少し変なことを言うかもしれないが、どこかの自治体に、仲間を何百人か集めて一緒に住んで、自治体も巻き込みながら、そういう価値観も良しとするような集団を作るのはどうだろう。みんなが生きがいを持って暮らしていく集団を、小さくてもいいから作っていく。

日本は今これだけコミュニケーションが発達しているので、うまく行っている集団があればみんな真似をすると思う。理想全部を実行することができないと思うので、現実の仕組みの中に入って行って、やっていくというのが現実的な道なのかなと思った。

応援したいと思いました。

●三浦颯さん(弟)

おっしゃられた通りで、小さいところでのモデル形成をしていかなければならないと思う。どれだけ小さくても良いので、煩雑なものを含まない、純然たるものをつくって、それを保護していったらいいと思う。

それを保護する過程で、現代の情勢の上に乗かってやって行かなければならない部分もある。例えば、「自分達は農業やります」と言っても、税金を払わなければならないし、借金も返さないといけない。

●参加者

税金のこともあるので、どこかの自治体に乗っ取って(笑)、組長さんも支援しているような、小さな成功例を創っていくというのが良いのではないかと思う。

●三浦颯さん(弟)

それが日本自治集団でやっていく活動なのかなと思う。自分達はその小さなモデルを作らないといけない。

●三浦夏南さん(兄)

いきなり200人とかの、どでかいことはできないと思うけど、今、自分達は自分の家族と弟の家族の2世帯を一つの一族にしてやっている。ここがまず一つになって、理想の農の生き方を実践することが大切だと思う。

ただ、マネーの拘束下にはあるので、もっと本来の在り方にして、モデルケースにしていったら、それを慕ってやり始める人も居るだろうし、学びに来る人も居る。

それを今、「自治集団で作って行きませんか？」と具体的に進めて行っているところ。

●参加者

マネーで何か買うことで豊かになる。だからマネーが必要になる。なので、「マネーがなくても豊かなモノが手に入れば、豊かな暮らしができるよね」というコンセプトもあると思う。

それがいいなと思うが、衣食住のこともあるし、米だけでは「豊かな暮らし」とまでは、まだまだ言い辛いと思う。

それ以外で何が必要なのか？というところだったり、どれぐらいの人が共同体に居ると、全体で豊かな暮らしを維持できるか、というところを、感覚でもいいので教えていただきたい。

三浦さんは「農」のことをされているので、それ以外の「エネルギー」や「住」の問題も、誰かが小実験して行って、解決していくということもできると思う。

●三浦颯さん(弟)

実際、一家庭が自給自足農業をして、何家庭分の食料をまかなえるのかというのは今後、調査していかなければならない。

食というのは一番のベースにあるもの。そこから派生して色々なものがある。

今は洋服ばかりになってしまっているが、和服を着る中に礼儀作法があったり、日本の伝統文化があると思う。糸を作るのも、本来は蚕からというものもあると思うが、なぜ今日本から和服が消えているかというと、採算が合わないから。

ユニクロとかが出しているのはファストな衣服で、その方が安いし、効率がいいということで、洋服が一気に広まっていった。そういうところも取り戻して行かなければならないと思っている。

住居も、現在はパネル工法になっていて、プラモデルのように家が建つ。

また、今の住居というのは冬を旨にしている。冬は外の気温と、自分達が過ごしたい気温が異なるので、エアコン代がかかる。そのエアコン代のコストを下げるのが、住宅コストを下げるという考え方が住宅業界にはある。

しかし、昔は夏を旨としていた。住むという中にも日本の伝統文化があり、住居だと、昔の家だと廊下がすごい長い。今の住居だったらNG。

「どれだけ坪単価を減らすか」ということに重きを置いているので、基本的には廊下は消す。部屋に個々に鍵が付いているのも、結局は「個人主義」とか「プライベートな空間を守る」という価値観が前提にあったりする。

昔は、家の住み方一つにおいても日本の伝統や文化というのがあったと思う。

もちろん、今行われていることが全て悪で、昔が善とは言わない。今行われているものの中でも良いものは取り入れていくべきで折衷して行くべきだと思う。むしろ、時代が流れているので、取り入れていかなければならないとさえ思う。

ただ、その還るという過程の中で、どうしても、「今残っているものの中でなんとかできないか」ということが先立つと本質を見失う。どちらかを強く言わなければならないとするなら、本質的なところを強く言っていきたい。

「資本主義の中にもいいものがあるよね」って、確かにいいものはあるかもしれないですが、「資本主義は駄目なんだ」って言わないと変えることが出来ない。なので、強く反対するという立場を取る必要があると思う。もちろん、西洋の中にもいいものがあるし、東洋の中にもいいものはあるのは承知の上。

●三浦夏南さん(兄)

表現として、「戻る」という話があると思うが、自分達が言っている戻り方というのは、「復古即維新」という戻り方で、今日話があったように「直毘に還ることによって発現邂逅していく」というニュアンスの戻る。

どちらかという、「戻る」というよりは、新たな世界に進んでいく為に、日本の本来あった根底のところに一旦立ち返るということ。そして、ここから発現させていこうということ。

どちらかと言うと、新しくなるイメージ。新たな生き方だけど、実は日本人が古来からやってきた根源的な生き方なので、これも結局は禊と関わって来ることだとは思う。

●参加者

どうしてそういうように思われるようになったのでしょうか。

●三浦颯さん(弟)

元々、自分達はずっとサッカーをやっていた。親がサッカーのスポーツライターで、サッカーをやることが家の中でのお仕事だった。

それがプロになるための道なのかはおいておいて、サッカーをやっていくことが全てだった。家族でサッカーをやっていくために人生が全部設計されていた。

学校を休んでサッカーの試合を観に行ったり。小さい頃から家族でサッカーをやり続けていくということが自分たちのミッションで、家で生きていくとか、家族で生きていくとかということが、周りよりは強い環境の中で育ったと思う。

兄、自分、父と3人でやっていたが、そのサッカーを兄が大学に行ったときに辞めた。エンターテイメントや、競技としてのサッカーではなく、「自分達がやってきた本物のサッカーの本質っていうのは何だったんだろう？」ということを考え、それを学問の中に求めた。

純文学だったりとか、哲学だったりとかの世界に入っていく末、日本神道があったり自治的な発想があった。

●三浦夏南さん(兄)

父は、非常に封建的な人間だった。自分達にとっては父が君主であり、師匠であり、自分達は子供でありという立場で、父親に対しては絶対的忠誠を誓ってやってきた。

その生き方というのは、皇室だったり、村での共同体的な生き方の伝承だったんだということを、国学や、水戸学、崎門学を深めていく中で再認識した。そして、それを行っていく現場が「農」だという結論に至った。

●参加者

仕事柄、組織論を勉強していて、先鋭の組織の中で、「ティール型組織」というものがある。それは何をうたっているかというと、「自立型の共助共栄のシステムこそ新しい」ということ。アメリカの学者さんが提唱されていて、いろんな企業が試している。

しかし、文献をよく読んで行くと、日本の元々あった文化の中でできていたことではないかなと思った。日本文化とか江戸時代の文化って「古い」とか、「復古主義」と言われることがあるが、今新しいと言われていることって実は昔日本が出来ていたこと。

それまでは、楽しい社会を築いていたのに、周りの人に「古い」と言われて近代化したということじゃないかな、と自分なりに理解した。

それを取り戻すことによって、世界の人は、びっくりするくらい新しいものと捉えてくれるんじゃないかなと思うし、それが世界の突破口になったり、モデルケースになったりするんじゃないかなと思う。「復古」と思わずにやりたい。

●三浦夏南さん(兄)

そこは、ケルト人や、古代のギリシャ人だったり、それぞれの民族達が本来的にしてきた生き方とマッチングしていくと思う。

古い生き方に戻って、それを新しく生み出していくことは、世界中の各民族の根底の部分を掘り起こしていくことにもなると思う。そこで祭祀で共有していけるのではないかなと思っている。

●参加者

北欧の方でも、太古の昔には自然信仰があったりするので、そういうシナジーが起きればよいのかなと思う。

●三浦颯さん(弟)

民主主義の代表として、ルソーやエミールが居ると思うが、そのルソーでさえも絶対王の絶対君主制が良いと言っていた。しかし、絶対君主、絶対血統を持った君主というのは居なかった。ただし、日本には居る。

世界の人が日本の文化的な生き方と完全対立しているわけではなく、彼らはそれを失って、我々はそれを持っていただけ。自分達がやりたい日本の国での自治集団の活動というのは、「日本国内で自給自足できて自立できればいいや」という、ナショナリズム的な活動ではない。それは世界の真理ではないと思う。

僕らが行おうと思っている活動は、もちろん日本国内で自給自足するという問題も含んでいるが、合わせてそれが世界を救済していく運動になっていくことだと思う。それが八紘一宇だったり、天業恢弘という形になっていくと思う。

今日の話にもあった高天原は、悠久の昔から存在しているが、今に顕現される。古くて新しい。

即維新は復古という話だと思うが、そういう世界観を推し進めていくことが元にあって、その根本の中で、現状の中にある食料自給率の問題を元から正していくことで解決していくのだと思う。

方法論はたくさんあると思うが、その根にある真理というのが一番大事だと思う。そこを忘れてはいけない。

●参加者

食料危機は間近に迫っていると本当に思っている。自分がやっているのは食料の備蓄。また、なんとか自給自足ができる方向性に行きたいと思っている。

肥料とか入って来ないということで、菌ちゃん先生と呼ばれる吉田俊道さんが言われている、化学肥料を使わなくても育つという「菌ちゃん農法」というのがあって、草刈りをして草を干しておいたら肥料になるらしい。それをやっていこうと思っている。

また、部屋の中で水耕栽培や、プランター栽培を、一人ひとりがしたりすることが大切ではないかと思っている。

食料自給率が低いのは困ったものだと思っているが、これから食料危機が起こるのではなく、起こされるのではないかと思う。世界では、肥料の倉庫が燃えるなどしている。食料危機は起こされるもの。

そういう状況で、どうすれば良いのだろうかということを日々考えている。

解決には至らないとは思いますが、一人ひとりが「食い扶持は自分で作る」という意識が大切ではないかと思う。お金を出したら何でも買えるという状況は終わりつつある。お金は紙切れになるのが近づいている。マネーがどうのこうのと言っている場合じゃない。

●三浦颯さん(弟)

じゃあ、今みんなの財布からマネーを出して、そのお金で畑をしようということですね(笑)。

●三浦夏南さん(兄)

自然農というやり方は、もちろんあるけれども難しい。自然農のやり方は、哲学的な部分も大いに含まれている。

自然農に深く精通している人は、「人間というのは自然の邪魔をしている」という考えの人も居る。人口が膨れ上がって、植物や動物が生きていける世界や、多様性を減らしたのは人間じゃないか、と。「人間ごときが慎ましく生きやがれ」と、人間こそが害悪だと考えている人も居るし、その折衷の人も居る。方法論だけで言うと無限にある。

その中で、ここが一番のラインではないか、というのは調査をしていければと思うが、根本、何を想って始めるかというのは、重要なのではないかなと思う。

●参加者

資本主義が発達して、機械が発展して、良いこともたくさんあると思う。

自分の食い扶持を自分で育てるというのは一番だと思うが、5家族か10家族、10団体ぐらいがコミュニティを形成して、そのコミュニティ内の人が食べられるような農家を育てるというのが理想的だと思う。

稼ぐ人も、違う仕事をしている人も居るけど、そのコミュニティ内の食料のメインの部分を、コミュニティ内の、自分達が知っている人たちが心を込めて作って、時折自分達も手伝いに行くとか。

そうすると、その農家さんも日本の伝統文化としての祭祀的な農業を体験できるし、働いている人たちも、休みの日に手伝いに行ったりして、食べ物の大切さを体験するというのが良いのではないだろうか。

そういう生き方が羨ましいと感じる人達が増えてくるので、それが広まっていく生き方が出来たら良いのではと思う。

今、最小単位が個人になってしまっているんで、個人で働いて個人で使うとかでも良いだろうし、家族単位で、5家族とか10家族でコミュニティを形成していくのも良いと思う。

そのうちの1〜2家族の人たちが農業をして、10家族を養っていくというのはどうだろう。それは可能だと聞いた。

「自分だけよかったら良い」という考え方では無い人達が寄り添って、その中でコミュニティを作って、そういう生き方のモデルを作って行けたらいいのではないかなと思う。

●三浦夏南さん(兄)

10家族を1セットにして、そのうちの1家族が農業をして他の9家族が支えるというようなモデル、いいですね。

●参加者

そうすると、だんだんと食費も減っていくと思う。

●三浦夏南さん(兄)

最終的にはその形が良いかもしれない。その為には、コアになるところのスキルを確立して、それによって生産物を増やして、まず固定費をぐっと減らす。そうすると、応援する人達も、応援が少なくて済む。

スキルの獲得であったり、コミュニティー化する為の過程が明らかになってきたら、まずは一セットの組を作る。体系化して、それをどんどん各地に展開していけるというのは、次の段階でできるかなと思う。

でも、まずは1つ目のコミュニティーを如何に創るか。それができれば広げていくというのは難しいことではないと思うが、1つ目がマネーに雁字搦めになっている状態から、モデルケースを作らないといけない。

まずは1つ目のモデルケースをどうつくるのかということを、自治集団内でやっていけば、どんどん拡散していけるんじゃないかなと思う。

●参加者

その一塊というのは、地理的に近いところに住んでいる必要があると思いますか？

●三浦夏南さん(兄)

それをどういう風にするのかというのは、考えないといけない。体験とかに来るとなると近い方が良い。

- 参加者

週一手伝いに行ける距離とか？

- 三浦夏南さん（兄）

それは理想的ですけどね。

- 三浦颯さん（弟）

輸送するコストなどかかるので近い方が理想的ですね。

- 三浦夏南さん（兄）

そうすると、思想とか技術がかなり認知されて、拡散されてないといけないですよ。僕らの周りで、志ある人を募らないといけないということになるので。

- 参加者

なので、考え方に賛同できる人の方が大事。「賛同するわ」と言って、10割賛同する人も居るし、賛同する顔をしながら全然賛同しない人も居るだろうし、その辺りは見極めていかないといけないと思う。

- 三浦夏南さん（兄）

むすびの里さんや、自分達や、賀正軒さんもされているので、まずはそこから、それぞれの個性のあるモデルケースを作ることですかね。

「そういうの面白い」となればモデルケースを展開していけると思うので、まずは最初のところですね。

- 参加者

自給率もそうですが、廃棄率も日本はすごい。それもなくしていける仕組みにしていきたい。

- 三浦颯さん(弟)

それは売る為だから。資本主義的に言うと、その廃棄しているところが農家の売上になっている。

必要な分だけピンポイントで配っていたら、売上は全く合わないので、廃棄される分が農家の儲けになっている。おかしい状態になっていると思う。

- 参加者

廃棄される分が、何千万人分ぐらいあると聞いたんですけど。

- 参加者

配給制にすれば、理論上はそれも無くなるんでしょうけど。

- 三浦夏南さん(兄)

そうすると、全体主義になってしまう。全体主義とか、共産主義とか、資本主義とかは、全部西洋の二元的な対立概念に基づいた考え方。

それに対して、一元的で万物同根で一体で開眼派生していくというのが自治思想。そこは根本的な考え方が違って、共産だとか資本だとか全体だとか個人だとかいうのは西洋近代の概念。

宗教的な観念上のものであって、本質というのは、万物が同根で、そこから派生していくというのが真理なので、そこに基づいたのが自治ということになる。

●参加者

お金の問題は現実的に突き当たると思うが、成功例を作って行く時に、どうしてもお金の力がないと作っていけない。

その考え方とぶつかる、矛盾する考え方も自分の中で抱えながら進んでいくと思うが、「矛盾上等」で、資本主義的な仕組みも逆に利用してやれば良いと思う。

最終的なゴールのところまでやりたいけれども、全部排除してしまうと現実のものにする時に苦しくなる。

仕組みの中に入るというより、賛同してくれる人は居ると思うので、今言った寄付的なことでも、お金をある程度集められると思う。

西洋的、日本的の考え方もあるが、根本はみんな「人間」なので、あちらから派生したものも使えるものは使えたら良いのではないかと思う。

●三浦夏南さん(兄)

正にその通りで、資本主義というのは正に自治の味方。自治をやっていく時、資本主義の仕組みを使って、お金を集めて拡大していくことができる。

ある意味、資本主義や個人主義がここまで進んでくれたお陰で、次の自治というゾーンに人間が入っていけると思っている。

西洋近代をめっちゃめっちゃ批判しているが、それ自体は使っていくことを考えている。農業でも機械をめっちゃめっちゃ使っているし。でも、使っているんだけど、本質的なところは祭祀的な農業で、本来的な日本人の在り方が大切と、絶対忘れてはいけないので、そこはしっかりやっていきながら、使える仕組みはどんどん使っていきたいと思っている。

今日も、YouTubeをしたらいんじゃないかと言っていたし。使える物はどんどん使っていったらいいと思う。それがチャンスになる。

●参加者

以前、「憲法を起草する会」の第四回の時に農業の話が出て、農業のことを全然わからず「どうやったらいいですか？」と質問をさせてもらって、「兼業農家をすれば良い」という話があり、自分でも何かできないかと思って、農家のお客さんの畑を休みの日に手伝いに行っている。農業を覚えたいなと思って行っているが、ほとんど草刈りばかり。草刈りが一番大切。

多くの国民は、農業に興味がない。興味がないからマネーで解決しよう、となっていると思う。手伝いに行かせてもらって、お米や野菜をもらった時、やはりとても嬉しい。美味しいし、これぐらい苦労してお米ってできるんだと勉強させて貰っている。農に全く興味が無いというところが問題かなと思っている。

大きく一気に進まないけれども、家庭菜園でもなんでも良いから、少しでも始めて行くというのが良いのではないかなと思う。

自分もプランターから始めたりしているけど、とても面白い。いいなこれと思ってきている。

今は、会社のお客さんのところに行っているので、会社の何人かを連れて稲刈りにも行こうかなと思っている。そういうところからはじめて、まず「面白いな」と興味を持ってもらうことが良いのではないかなと思う。

●三浦夏南さん(兄)

いいとは思いますが、そこから専業農家になるとめっちゃくちゃ苦しめられる。

今面白いと思っているのは、ちゃんと稼ぎがあって、生活が安定していて、農業のいい部分だけに触れるから。

一歩専業の世界に入り込むと、資本主義でガチガチに固められた農業が待っている。みんなが楽しいと思える農業を実現しようと思うと、本来の農業を回復して行かなければいけない。

今の農業に入ると、ただ貧乏でめっちゃめっちゃ苦しめられる。メガファーマーだけが不労所得で稼げるという状態。小さい農家達は全く稼げない。

「農業辞めてITの世界に行こう！だってカッコいいもん」って実際はなっている。

- 参加者

兼業農家では難しいのですか？

- 三浦夏南さん(兄)

それは捉え方によるかなと思います。

- 三浦颯さん(弟)

兼業でも、実際農業に携われば、現状の農家が置かれている問題点がわかると思う。体験するというのは本当に大切だと思っていて、自分達も実際に農業を体験してきて、「米って本当に一年かかるんだな」って、改めて気づけた部分もある。

農業は、世の中のPDCAサイクルの何分の1のスピードでしか進んでいない。しかし、人間の現代社会って全てPDCAサイクルで回してガンガン進めていく。

農業って、本当に種を蒔いてから1週間経たないとわからなく、「こいつ生えるのか？」と思うことが多々ある。そういう時間の流れを、自然に戻すという感覚も、農業に携わると培えるので、兼業でやっていくことも良いと思う。

本質的農業を取り戻す、というきっかけにもなるので、悪いことではないと思う。

- 参加者

YouTubeはありだなと思っている。自分の5個ぐらい下で、慶応大学を卒業した男の子5人が、長野で、地域おこし協力隊の制度を使って農場をやって、YouTubeチャンネルを始めた。

意思としては、「こういう生き方もあるんだよ」ということを同世代にも伝えたいということらしい。

慶応大学に行った若い子たちが、農業を始めて、仲間たちに発信しているということは、興味のある子達が居るってこと。YouTubeなどのメディアを活用してやっていくのは、若い子達に興味を持ってもらう為に良いと思う。

●三浦夏南さん(兄)

若い子達にはすごく響くのではないかなと思う。実際、自分達も学生の時に勉強をしていたら、20～30人ぐらいは集まっていたので、こういうことに興味ある子達は居る。

居るんだけど、社会に染まると戻って来れなくなってしまう。YouTubeなどで発信していくと、それに入る前の若い子たちに気づかさせていけると思う。

農をやっていく体制を我々大人達が整えておけば、その子達を育んでいくことができるのではないかなと思うので、YouTube事業は面白いと思う。

●参加者

面白いのは、さっき話にでた、稲川義貴さんを小学生が知っているらしい。

YouTuberが稲川義貴さんを紹介して伝えていって、小学生に届いているというのがあるので、YouTuberがそうやって広げていったら「こういう生き方があるんだ」ということを、多くの人知っていくのではないかなと思う。

●三浦颯さん(弟)

武術チャンネルとかってめっちゃ人気がある。截拳道(ジークンドー)というブルース・リーの武術を受け継いでやっている人とか。昔天皇陛下や殿様を護って来た隠密の人の子孫が、「秘密を明らかにします」とか、そういうのがすごく人気。

●三浦夏南さん(兄)

自分の一番下の弟は高校生だが、荒谷さんのことが「おやじ」だということを知っている。

稲川さんが「あの人のことは先生と呼びたくない『おやじ』だ」って言ってたのがYouTubeで広がるぐらいYouTubeは若い世代に影響力がある。

●参加者

今日はじめてこの場に来させてもらった。長崎から来た。年齢は、現在24歳で、若い部類に入るのかなと思う。

荒谷さんのことだったり、南出先生の本を、興味があって読んでいるが、実際にどういうお話をされているのかを、お聴きできればと思って来た。

自分達の世代は、アメリカ社会のような、SNSだったりIT社会の恩恵をもらって来て、本当に大事な日本文化とかそういう教育は全て抜かれている。

教育の必要性とか、そういうことを知ってもらうところから、なんとかしていけないといけないと思う。若者向けの取り組みとか、考え方とかを知ってもらい、作り上げていくことが大切だと思う。

これからは自分達の世代が動いていく世代だと思うので、その世代の取り組みや、考え方を知ってもらって、「こういうやり方ってありなんだな」と憧れられるようなやり方とか、将来的には、そういうのも使わなくてもそういう社会を作っていくことがベストだとは思う。

今の状況を活用しながらやっていくのがすごく大事だと思う。

自分は身体づくりが趣味。米とか発酵した食品など日本人に合っていると思うので、そういうところもインフルエンサーに紹介してもらい、若者が羨ましがするような構造を作るのも良いな、と思って聴かせてもらっていた。

●三浦夏南さん(兄)

若い人たちが「こういう生き方をしたいな」というものを、具体的に体現してみせれるようなものを作っていかなければならないと思う。南出先生が言われていることを、自分達は現場で実践していきたいというのがある。

南出先生のご文章を具体的に形にして、農の現場で実践していけば、それに共鳴する人は自ずから出てくるのではないかと思う。若い人ほど出て来ると思う。

●三浦颯さん(弟)

やらんとわからんということが多い。

現在の教育は、理論武装して知識の共有をして、「こうだねああだね」と議論することに注視してやっているのだけど、やはりそれが間違っていて、本来学問というのは、行動なしには考えられない。

知行合一とかそういうものもあるが。やらんかったらわからないので、農業もやってみないとわからないことがある。

もっと言えば、「農業で生きていく」という生活の中で農業をやっていないといけない。

倫理道德というのも全てそこで培われた。それを取り戻さないといけないという人は居るが、「それを取り戻す為に農業をしているんだ!」という人は居ない。その机上の空論をいくら論じても、「日本人ついてこれるの?」っていう話だと思う。

農業をやることに対してはコミットして欲しいが、まずはそこから発生する伝統文化教育というものを一体としてやっていくような農を取り戻さないといけないと思う。

●参加者

ある程度、塊と一緒に住んでいないといけないが、ハイブリットでも良いと思う。そういう形と、遠くに居てもネットで繋がって支援してくれる人が居てもいい。

でも拠点があって、そこにある程度の塊があって、行政が味方してくれると尚良しかんと思う。

●三浦颯さん(弟)

小さい村とかだと、「お前やる？」みたいな感じで決まっているのでいけるとは思う。

あともう一つ重要なのは、本当に生活のかかった農業というのはめちゃくちゃ人間関係が難しい。「兄弟仲良くやってきたんだね」って見えていると思うが、正直、兄弟家族が合わさって一つの家庭で農業をしていくというのはめちゃくちゃ難しい。

自分の奥さんと兄の奥さんって、普通は一緒に住めなくないですか？よく考えたら兄弟家族で住んでいる家族って居るかって言われたら居ない。

兄弟仲良しで「イエーイ」と言ってやっているのではなく、学問があって、そこで絶対に護らないといけない倫理道德というものがあるから出来ている。

逆に言えば、農業をしているからそれが必要だし、それを求めないといけないから農業をしているということでもある。双方有機的に繋がっている。

自分は元々就職をして、自分はお金を稼いで、兄は農業をして、とやっていたのだが、最終的に、何故会社を辞めようかなと思ったかというところ、お金の算段が付いたからとかそういうのではなく、社会に居ると社会に染まっていってしまうから。こんなに学問をしているのに染まってしまう。

社会の中だとどうしても、「なんでこうやって成功させないんだ」という、結果が重要視されてしまう。

自分も15kg程ストレスで太っていたし、「なんかこれはいかん」と感じているところがあって、やっぱり学問だな、と思って会社を辞めた。

学問をしていて、「社会を利用やるぜ！」って社会に飛び込んだら意外に染まっちゃう。政治家もそうじゃないでしょうか？志を持って、「日本を変えてやる！」と言って入ったのに、入ったらシガラミだらけで、「ここだけは清濁合わせ呑むぜ」とか、妥協しているうちに「何を目指していたの？」ということってたくさんあると思う。

何かを掴んだまま、いい感じにいいものを掴もうというのは難しくて、やはり手放さないとつかめないものもあるので、捨てることというのも重要だなと思っている。

●参加者

依存し合って営んでいることに対する煩わしさというのが、若者を都会に向かわせている面があるのも事実。

いい面というのはよく話に出るが、人間関係などの苦しい面をどんなふう乗り越えて、塊を作ってやっていこうと思われているのでしょうか？

●三浦夏南さん(兄)

それが共同体だったり、村の中で育まれて来た風俗だったり、伝統だったり、だと思う。それが律していくものになっていく。

神々を祀って農業をやって行く中で獲得していくもの。そこをしっかりと学んで、けじめを付けて行くことができれば和合することはできない。家族を和合できない人が、共同体を和合することができない。

共同体というのは、家族の延長線上にある。だからまずは家族のところで倫理道德を実践していくということを農を通してする。だから昔の人は倫理的だったのだと思う。倫理的でなければ農業もできないし、戦争もできない。

そういうところで人間が作られていく。だから自分は家族を無理やり農の現場に連れて行った。そうすることで本当の日本人になれる。そこが今の日本人が日本人でなくなっている本当の理由なのではないかと思う。

●三浦颯さん(弟)

僕らも元々は、大学教授に言われて大学職員になる予定だった。それは決まっていた。

そうになっていく予定だったが、根本のことをやるんだったら、本当にそっちに向かって行かなかったら、中途半端な精神になるなと思った。

公務員をやりながら農業やっていたらそれなりの学問にしかない。自分達は「本質的な学問を求める」ということに重きをおいていたので、そこは妥協しなかったこと。

周りの大人、皆に言われた。「まずは生計を成り立たせてから大切なことを言わないと、持続可能にはならない」と。言われ続けたけど、そこを妥協してしまったら若者もそう思うと思った。

「会社に行ってから農業をやろう」という、それも大切だろうけど、本質的な生き方という、純粋なものというのは創りきれないと思った。

●参加者

カッコいいなと思った。カッコよさが人を絶対引きつけるので、どう伝えるのかということが大事なかなと思う。

●三浦颯さん(弟)

自分も、大楠公がすごくカッコいいなと思った。楠木正成公という日本で一番規範とすべき人がいて、大楠公をすごくカッコいいなと思っているのに、大楠公みたいになろうとしないのが恥ずかしいというのが最初にあった。その大楠公の生き方というのを自分達の生き方にしていかなければならない。

自分は、楠木正季公にならないといけないと思った。そんな人間になればいいな、と思っている。大楠公が最期に言われた「七生滅賊」という話も、正季公が正成公に、「何か言い遺すことはあるか？」と聞いた時に、「七生滅賊」と出てくる。だからあれは正成公の言葉ではあるが、正季公が言った言葉で、そこに非常に美しい哲学があるなと思った。

正季公が言った言葉が、正成公の言葉として語り継がれている。だからこその命一体。あくまで正成公が中心に居て、正季公がそれを支える構造。

それは支配の構造ではない。弟は兄の言うことを聞かないといけないということではなく、職分とか、天分とか、そこを全うしていくことが美しく、その美しさが日本の伝統文化の根源を担っていると思っている。

もちろん、「なぜ兄はこんなことを思んだろう？」と思うことも多くて、「なぜもっと作業をしないんだろう？」とか、逆に「なぜ休まないんだろう？」と思うこともある。

しかし結局、「最終は兄が決めたことで行く」という、倫理や道徳を護っていくということが重要であって、生命観とか命観はそこを全うしていくことが尊いと思う。

その「尊いな」と思うことは受け継がれていくと思う。だから煩雑なものを混じらせてはいけない。

●参加者

感想みたいな感じになるが、最近テレビでドキュメンタリーの映像がやっていた。

三重県の伊賀の農家に取り上げられていて、そこはお米を育てた後の脱穀した藁を、牛を育てている農家さんに持って行って、それを牛が食べて、そして牛の糞を米農家さんが使用するという、循環している農法を聞いた。

今の農業は企業化と工業化して、連携がなくなっているように感じている。個別化というか蛸壺化していて、「うちの畑はいいけど、よそは知らん」となっている。

これは農業に限った話ではないが、身近なケースで言うと、地域の治安を守るために警備会社と契約をするけど、地域で声掛けはしないとか。

企業とか、国とか行政がしてくれる前に、「もっとこういうサービスがあったらいいな」と思いついた時に、実行力があったら効果的なケースが多いような気がしていて、人に頼らないサービスから、地域の連携を見つめ直していくと、意外とできることって結構あるんじゃないかと思った。

●三浦颯さん(弟)

あると思います。実際に、自分達も牛を育てている人から牛糞をもらっている。

もうちょっと言うと、うちの祖母などは救急車が通ると、「どっち方向に行ったか」って心配になる。そのへんはみんな親戚で部落なので心配になる。

そういう中で育まれた地域の連携が重要かなと思っている。

●三浦夏南さん(兄)

昔の共同体は、親族というか家族の延長線上で、だから循環がしやすかったのかなと思う。今は近い親戚でも、他人みたいな状態になっている。

自分達の部落は5個しか名字がない。実家の両隣5・6件は全部三浦。そういうのが30世帯集まって昔の部落ができていた。家族。だからこそそういう循環でそこで生きていくというのができていた。

今は個人に分裂してしまったので、他人に持っていくのはよくわからないとなってしまう。

●三浦颯さん(弟)

部落で神社を祀っていて、その産土や氏神様を祀っていたけれども、明治維新以降に統合されて、今は「総合神社」と言って、27社が合併されてできた神社がある。

それは佐倉宗吾郎という人が居て、「そこら辺の神社をまとめちゃえ」ってやった。そうになると部落の意識なんかはなくなってしまう。

●三浦夏南さん(兄)

それをやったのが明治。27社が合社ですからね。それをやって神社っていうのはちょっと。

●三浦颯さん(弟)

新居浜市という街があって、喧嘩太鼓・喧嘩祭が有名で、祭りが盛ん。部落で因縁があって、江口の人間とは絶対口を聞かないとか。そういう意識があった。

元々は神社があったが、全部統合されて、今は一宮神社という一宮しか残ってなくて、全部祭太鼓がその神社に集結するので大喧嘩になる。

孫の世代までその部落に居ない人は青年団に入れない、とか、昔の民族っぽいのが残っているが、だいぶ解体されつつある。祭だけがみんなのストレスのはけ口としてあって今でも盛ん。

●おやじ

何か言い足りない人は居ないですか？

●参加者

いっそのこと、もう国を盗るしかないのではないだろうか。国を盗って社会とか制度とか全部そういうふうに一気に作り変えるしかないと思う。

ミクロな形でやっていっても自ずと限界が見えてくると思う。教育の実態としてもそう。個人主義というのが走っているし、経済的にも大企業が有利になっている。政治的にもそう。

国自体を一回壊すか、ちょっとずつ浸透させていって、あるタイミングで革命的にガラッと作り変えとか、そういうやり方をしないと、日本本来のやり方に戻す方法は無いんじゃないかと思った。

●三浦夏南さん(兄)

自分達はちょっと違う考え方であって、エゴによって進展していった資本主義社会というのはエゴによって滅んでいく。

しなければならないのは国盗りではなく、国創り。復古することによって新しい自分達の国を創っていかなければならない。

破れて消えて行くものを盗ってもしようがない。放っておいたら良い。ヤマタノオロチのように自壊していく。

自分達がしなければならないのは、国創りであり、在り方というのを自分達自身で体現していくこと。そうすると、自ずから誤れるエゴは消えていく。国盗りは考えてない。それが自治の道だと思う。

●おやじ

どう社会を形成していくか、方法は色々ある。

先程、「どう感じているか」という話があったが、間違いなく、自分は今までの生活の中で一番豊かさを感している。

自分の理想を、直接的に生活全体で表現して着実に近づいているかどうか。客観的な評価は難しいが、主観的には近づいていると感している。それが自分が感する豊かさ。

そういうところからアプローチして「皆さんもどうですか？」というアプローチもあるだろうし、ノウハウから入って行って、「こうやっていったら出来ますよ」というやり方もある。

こんな世の中だから、最近はお金を持っても安定しないので、「現物を持っていないと安定しないよ」という言い方もあると思うが、思想のところを根本的に大事にしなければならない。

本当はそこからやりたい。しかし、そこから人を巻き込むというのは大変ではある。

いろんなやり方を考えていく中では、思想がなければ、戦略も作戦も戦術も立たない。思想の根本がないと、戦術が目的になったり、作戦が目標になったりして訳がわからなくなる。だから思想のところはとても大事。

少なくとも自分自身はそうだし、日本自治集団でやっていく中でも、そこだけはちゃんとしなければならないなと思っている。

報本反始という、本に報いて始めに反するという言葉があるが、日本の根本思想というのは、一言で言うとそういうことだと思っている。

何を良しとするか？という、一番最初が正しいのだということ。宇宙の一番最初であり、地球の一番最初であり、原点というか、最初が一番正しい。

問題があったら、そこに戻ってみて考えようというのが禊行でもあるし祓えでもある。

それは、元の形式に戻るとか、元の状態に戻ることとは根本的に異なる。自然の本質というところに立ち返って、本当に見直してみるというのが大切。

そこに立ち返ることによって、エネルギーとか、頭の中が一回リセットして、ぐいっと進む。復古や維新についてはそういう風に理解している。

その思想のところはとても大事。その思想に基づいて形成されて、「楽しい」、「豊か」とか、「技術的にもいい」とか、「生活もこれで安定する」とかという、そのモデルを日本自治集団で、早い時点で形成していきたいというのが当面の課題である。

そこさえ揺るがなければ、あとはいろんなアイデアがあってもOK。お金が余っているのであればお金を持って来ればよいのではないか、というのも思想さえあればOK。

それがただ、根本思想なくやると、この世界の中でのやりくりになってしまう。

例えば、同じように見えても、お金持ちが、「自分たちが健康なものを食べたいので、三浦さん達のような集団を飼って養って、薬も何も使わない健康なものを作って食わせなさい」という管理社会にも入り得るだろう形と、「こちらからこういうのをやるのでお金を出してみる気はない？」というのは全く違う。「お金を出して貰えれば健康的な物を食わせてやるよ」と。

一見同じように見えてもそこは本質的形態が違って来る。そこは思想嫌悪にして、お金を出させてやって、こちらに巻き込んでいく。思想の嫌悪制が絶対的な条件。そこさえ揺らがなければいろんな可能性が見えてくる。

食料安全保障の話で見ると、イギリスやアメリカと手を組んでいたのは、お金があれば何でも買えるという世界の仕組みだったので、お金を印刷する能力のある国と仲良くしておくというのは妥当な政策ではあった。

しかし、今は現物を持っている国の方が強い。ロシアとか。そうなってくると現物を持っている奴と付き合っていくというのが正しい安全保障の在り方になってくる。

また、付き合い方も、自立して付き合うというやり方と、依存して付き合うというやり方もある。

国という単位で考えるのであれば、国として、ちゃんと国民意識が一致団結していれば、ロシアや、大国とだって、依存しないでも食料を輸入したりもできるはず。そのへんも踏まえて広範な知恵を絞ってやっていきたいと思う。

ただ、テーマが具体的でないと、そういうことを深く議論ができない。ちゃんとやって議論していくと、頭も整理される。あとはこういうお話をした後に、自分も、今の現状にどう反映させられるかなど、それは個々の課題。

「今日は面白い話でよかったね」というのは、無駄とまでは言わないが、自分の生き方に対してはもったいない時間になる。

そんなところをうまくやっていけたら良い。それを自分で持ち帰って実践し出すと、三浦さんと会った時は、話し方とか対応の仕方が変わってくる。「俺もやっているんだ！」とかね。

そういうふう to 広がっていくと良いなと思う。「実際に自分も農業をやっていくことにしました」とか。個々の間で、「仲間を作ってみました」とか、そういうのがあるといいなと思っている。

意外とこういう議論は、皆、真面目に考えないといけない、とヒシヒシと感じていると思うので、次回の衆議の時間もこのような形でやっていけたらと思う。いろんなテーマで、掘り下げていける問題がいっぱいあると思う。

もし、これについてなどあれば、先に言っておいてもらえたらと思う。

できるだけ、持ち帰って、自分の生き方に実効性を帯びれるようなテーマが良い。

今後、そういうふうにして衆議の時間はやっていきたい。